

「幼稚さからの脱却」

エペソ人への手紙 4 : 1 2 - 1 6

March.3.2024

エペソ人への手紙 4 : 1 2 - 1 6 (パウロ)

Preface

使徒パウロが開拓した教会に、コリント教会という教会がありました。

パウロの書いたコリント人への手紙によりますと、コリント教会のクリスチャンたちは、主イエス様をととても熱心に信じており、聖霊の働きが豊かに現れていた教会であったことが分かります。

こんな賜物を頂いた人、あんな賜物を頂いた人と、羨ましい限りの多くの良い聖霊の賜物を頂いていました。

ところが、せつかくの素晴らしい賜物を頂いている人たちが、幼稚でした。

「誰が上なのか、誰の賜物の方が素晴らしいのか、誰の方が優れているのか、誰の方が知っているのか、私の賜物の方がレベルが上で、私の方が知っていて、私の霊性の方が優れている」と言いながら、同じ心、同じ考えを持つことが出来ずに、仲間割れをしていました。

そのような状態をあたかも、「目が手に向かって『あなたなんか知らない』、頭が足に向かって『お前なんか知らない』と言っているようなものですよ」と指摘されるほどに、使徒パウロに心配をかけた教会でした。

先程読みました聖書箇所、「キリストの満ち満ちた身丈にまで」という言葉と、「私たちはもはや子どもではなく」、つまり「幼稚なままではなく」という表現が出てきます。

幼い子どもと成熟した大人、未熟な幼稚な人と成熟した人について言及していますが、では、何をもって未熟・幼稚と言っているのか？

「私の方が上だ、私の方が優れている、私の賜物の方が立派だ、私の方が強い、私の方が知っている、私の方が合っている、私の方が整えられているし、霊的にも、信仰的にも、経験的にも長いし、深いし、上だ」という思いや考えが、幼稚だということですね。

新約聖書の半分を記録した使徒パウロでさえも、「私はあなたがたよりも優れているし、霊的に深い境地にあるし、神により近い位置にある」なんてことを言ったことは、ただ一度もありませんでした。

むしろ、「イエス・キリストのことを考えると、父なる神さまのことを思うと、申し訳なさばかりで、罪人の中の罪人であり、罪人のかしらであり、使徒になんか値しない取るに足りない者でしかなく、感謝以外口にすることは出来ません」と告白しました。

新旧約聖書に記録されているイスラエルの民たちの姿を見ますと、誤った選民意識を持っていたことが見て取れますが、私たち人間皆、大なり小なり誤った選民意識のようなものがあるように思います。

日本人として、韓国人として、中国人として、アメリカ人としてという民族的優越意識のみならず、一個人としても、クリスチャンとしても、誤った選民意識のようなものを持ち合わせているように感じます。

天地万物をお造りになった神さまは、各々に、各々に相応しく賜物をお与え下さったのに、自分の賜物が全てであるかのように、それだけが優れているかのように誇り、誇る気持ちを持ち、そういう気持ちを持てた時には心が高ぶり、持てなかった時には怒ったりがっかりしたり、人を見下げ、人が持っている賜物や才能を見下げ、自分よりも劣っていると見なすような幼稚さが、私たちにはいつもあるように思います。

でもそれが、幼稚さだとは気付いていない、逆に優れているところだと、私の持つ鋭いところだと思ってしまう幼稚さがあります。

Part One

教会には多様な職分、役割の違いや奉仕や立場があります。

スタッフ、長老、役員、食事当番、掃除当番、礼拝奉仕、各四事業所の職員、各クラスのリーダーや奉仕者等々ありますが、それらすべてが神から与えられた賜物でありますし、神の教会、キリストのからだを建て上げるために与えられた役割であり、神の豊かさの表われですよね。

これらすべては、役割の違いでしかありませんが、ともすると私たちは、誰がもっと苦労しているのか、誰が上なのか、誰が偉いのか、誰がもっと重要な立場で重要なことをしているのか、私がしていることの方が大変で重要なことだから、そのことについてもっと皆が注目し、関心を寄せ、協力してくれるのは当然のことで、そうではないとへそを曲げてしまったり、怒ったり、また見下したり、批判してしまったりするようなことがあるように思います。

そしていつのまにか、神が主である教会ではなく、人が主人のような教会になってしまうことがあります。

例えば、私は教会の牧師ですが、聖職者とも言われ、神の言葉である聖書を語り、教え、宣べ伝える役割を担っていますので、重要な役割を担っていると言えるでしょう。

もちろんこれは、牧師が重要だということではなく、神の言葉が重要であるがためのことですね。

そんな尊い御言葉を取り扱う牧師が尊ばれることは、まあそれなりに妥当なことかもしれませんが、行き過ぎた過分な尊びは、聖書の教えに反しキリスト教精神に反することになってしまいます。

また、牧師に対して信徒のことを平信徒と言ったりすることがありますが、この表現も決して正しい表現だとは言えないでしょう。

平信徒がいるならば、高信徒がいて、低信徒がいるのでしょうか？

社長信徒がいて、部長信徒がいるのでしょうか？

平信徒という言葉自体が、階級的な言葉ですよ。

人は、罪ゆえに劣等感を抱く者となってしまいましたので、事あるごとに、階級や階層やレベルを付けたがるようになってしまいました。主イエスの内にあって、神の前にあっては、皆が平等で、皆が同じです。

牧師も信徒も皆、主イエス様を信じるならば平等に神の子であり、同じくイエス・キリストを信じる信徒であり、任せられている、または与えられている役割や賜物が違うだけであり、皆同じですね。

もし牧師だけが尊ばれ、長老役員だけが尊ばれ、奉仕や仕事をたくさんしている人だけが尊ばれ、献金をたくさんしている人だけが尊ばれるならば、もうそれは、聖書の教えるキリスト教精神に反することになってしまいます。

良く引用する聖書箇所ですが、第一ペテロ 2 : 9 に、

ペテロの手紙第一 2 : 9 (パウロ)

とありますが、ここにある「王である祭司」とは、聖職者のことですね。

でもここで、決して、「牧師や長老や役員が王である祭司」だとは言っておらず、「あなたがたは王である祭司」、「あなたがたが告げ知らせる」と言っています。

つまり、私たちキリスト者そのすべてが、王である祭司であり、王である祭司としてイエス・キリストのことを宣べ伝える聖職者であり、主の僕であるわけです。

私たち一人一人は、階級や地位やレベルが違うのではなく、主から任せられている役割・賜物が違うだけの同じく王である祭司であります。

Part Two

教会のみならず、この社会に生きるキリスト者として、ある人は商売をし、ある人は芸術をし、ある人は子どもたちを教え、ある人は家事をし、ある人は有資格者として働き、またある人は教育機関で学んでいます。主イエス・キリストの内において、それらに階級や地位やレベルやステータスの違いはありません。

ただあるのは、役割の違いだけであり、それらすべてが主の内であれば、その置かれた場において神の国を成らせ、キリストのからだを建て上げることに繋がるだけです。

私が大学3年の頃、少し就職活動をしたことがあったのですが、クリスチャン

になる前の私は、「あれもしたいし、これもしたいし、ああいう職業こういう職業に就いて、ああいうステータスを得たい」というこだわりのようなものがあったのですが、クリスチャンになってからは、「どんな職業でも構わない」と思うように変わっていました。

「どこに行ってもその置かれた場で、イエス様を語り、クリスチャンとして生き、真理があることを、私たち皆尊い存在であり、神に愛されている存在なんだということを醸し出しながら生きられればいいや」と思うようになっていたことに、自分でもびっくりしたことを今でも覚えております。

もし商売をしている人が、イエスを信じる心をもって、イエス様を信じる人らしく商売するならば、この世の中に、その経済活動に、その商圏に、神の義が、神の国が成っていかないでしょうか？

もし音楽をする人が、芸術をする人が、文学をする人が、家事をする人が、料理をする人が、研究をする人が、キリストの心をもってそれを行うならば、文化や文明や家庭に影響を及ぼし、美しい世界となっていくでしょうか？

もし教え、学ぶ人が、キリストのことを思いながら教え、学ぶならば、人を愛し愛されることを最も大事にするようにはならないでしょうか？

神さまは、各々が、各々の役割を担っていくための賜物、才能を与えて下さいました。

ある人には芸術、ある人には体育、ある人には商売、ある人には教育、ある人には料理、ある人には何でしょう、人の数だけ与えられている賜物があります。

そして、そのすべての賜物には、一切の優劣がありません。

皆平等です。

すべての賜物や才能は、皆平等であり、一様に必要なものであり、素晴らしいものですね。

一見とっつきにくいものだとしても、そこから忍耐を学び、寛容を学び、待つことを学び、赦すことを学び、愛することを学びます。

つまりは、主イエスにあって、神にあって、すべての人間その存在そのものが賜物だということです。

人の存在そのものが、神よりの賜物であるということを知り、認識し、それを生き方に表せることこそが、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するということでしょう。

そして、それこそが、幼稚さからの脱却です。

なんとこの世の中、幼稚さに満ち溢れていることか分かりません。

その幼稚さゆえの争いや競争や傷つけ合いで、溢れていることか分かりません。

私に与えられた賜物ゆえに、私が人の助けとなり、人も私の助けとなり、互いに助け合いながら神の国が成り、キリストのからだが建て上げられていく、主の

内にあつてすべての人は違うけれども、主にあつて皆同じ人間であり、人に優劣なんかない、賜物に優劣なんかないという認識を持てる人こそが、もはや子どもではなく、一人の成熟した大人、キリストの満ち満ちた身丈にまで達した人だということでしょう。

高いも低いもなく、偉いも偉くないもなく、立派も立派でないもなく、人を見下ろさず、驕慢になることもなく、人の存在や賜物や背景において老若貴賤なく、私だけが重要なのもなく、私だけが正しいのもなく、私の感覚だけが優れているのもなく、主にあつてすべての人は平等であり、すべての人が尊ばれるに値する存在であるという考え、認識、生き方が、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するということでしょう。

Part Three

ですが皆さん、これは、とても難しいことでもありますよね。

どれくらい難しいかと言いますと、イエス様に3年間も従って行きながら、一緒に食事をし、一緒に寝て、一緒に生活をしたイエス様の弟子たちでさえも、誰が一番偉いのかと論じ合いながら、イエス様を心配させていました。

マルコの福音書 9 : 33 - 35 (パワポ)

ルカの福音書 22 : 24 - 30 (パワポ)

主イエス様に従う者には、先程のペテロの手紙にもあったように王権が委ねられていますが、この王権は、この世の王権とは違います。

偉さを競う王権ではなく、後になり、仕えていく王権です。

Upside-Down Kingdom ですね。

ひっくり返った王権、ひっくり返った王国が、イエス様の仰る王権です。

誰が一番偉いのかと論じ合うことが幼稚なことだとは気付かず、むしろ、自分たちが優れているからゆえに、また鋭いからゆえに、偉さについて論じあえるのだと思っていた幼稚な弟子たちに、イエス様は、人を尊ぶことをお教えになりました。

キリストの内にあつて一人の大人として成熟し、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するということは、どんな人をも尊び、人格的に接したいと思い、人よりも自分を低くすることが出来、人を自分よりも優れた者と思え、主の内にあつて与えられた賜物や才能は違えど、すべての賜物や才能は平等であるという考えを持って、互いに尊重し合い、愛し、平和の絆で結ばれて一つとなり、互いに協力して生きるということでしょう。

そして、これを生きようとするのが、幼稚さを脱却することであり、

キリストの身丈にまで達することをその命の目的としている、成熟した大人です。

私たちにも、イエス様の弟子たちと同じような幼稚さがありますよね？
だから祈るのです。
だから祈りましょう。

「神さま、私の中にあるこの未熟な幼い子どものような幼稚さを捨てさせてください。

私が偉い、私が上だ、私の方が出来る、私の方が大切だ、私が正しい。

そういうところに欲望を抱くのではなく、すべての人は主にあって一つであり、ユダヤ人もギリシャ人もローマ人もなく、日本人も韓国人も中国人もアメリカ人もイラン人もインドネシア人もなく、知恵ある者も知恵のない者もなく、富んでいる者も貧しい者もなく、すべての人は主にあって平等であり、同じであり、一つであるという考えに至って、神さまが喜ばれるキリストのからだを建て上げていく私たち一人一人とならせて下さい」と祈りませんか？

Conclusion

エペソ書4書の冒頭部分で、「聖霊にあって一つでありなさい」と説いていますが、私たちには上も下もありません。

上も下もあるという幼稚さから脱却して、ともにキリストの満ち満ちた身丈にまで成熟する心を持つならば、平和の絆で結ばれて、愛の内にその体全体が建て上げられていくことでしょう。

そして、「それを成し遂げなさい」と、神さまは一貫して語り掛けて続けておられます。

私の賜物が誰かの助けとなり、誰かの賜物が私の助けとなり、キリストのからだは建て上げられ、神の国が成り、聖霊の有機体、愛の有機体となることを祈りたいと思います。

私たちの置かれた教会で、学校で、職場で、家庭で、私たちの生きるすべての領域において神の国と神の義が成ることを願わずにはられません。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ4：14－15